外国人スポーツ留学生を対象とした日本語教育の基礎的研究

渡　辺　史　央

要　旨

本研究は，大学で学ぶ留学生のなかでも競技目的に来日した外国人スポーツ留学生に着目し，大学における日本語教育実践に質する基礎的研究を行おうとするものである。これまでの日本語教育の分野において，スポーツ留学生を扱った研究は少なく，スポーツ留学生にとって必要な日本語教育とは何かについて具体的な検証はなされていない。そこで本研究では，外国人スポーツ留学生の日本語教育に対するニーズを探るべく，高校から日本留学し大学で競技をしている留学生と，社会人チームの現役競技者および元競技者へのインタビュー調査を行った。

キーワード：外国人スポーツ留学生，日本語教育，インタビュー，質的分析，ニーズ

1. 研究の背景

日本政府の「留学生受け入れ 10 万人計画（1983 年）」や「留学生受け入れ 30 万人計画（2008 年）」のもと，日本は過去 40 年間にわたり，多くの留学生を受け入れてきた。そして，それに応じる形で日本語教育研究も発展してきた。日本語学習者のニーズの多様化が顕著になる 1990 年代以降，JSP（Japanese for Specific Purposes：特定目的の日本語）への理解が進み，分野別の日本語研究および教材開発が盛んに行われるようになった。たとえば，理工系・社会科学系留学生に向けた分野別日本語教材や，外国人介護・看護人材，技能実習生，家事支援人材に向けた研究など，近年の需要の高まりに応じて開発研究が進んでいる。[1]

一方，留学生の中には「スポーツ選手としての留学，または競技力向上や，そのための練習活動を行うことを主目的として，日本に滞在している外国籍留学生」（松元・高橋 2009），いわゆる「外国人スポーツ留学生」がおり，その数は近年増加傾向にある。しかし，外国人スポーツ留学生は，アカデミックな留学とは来日目的が異なり修学よりもスポーツ選手としてのパフォーマンスに比重が置かれるため，言語支援を含めた受け入れ体制の整備は立ち遅れており，日本語教育の分野でも研究対象として取り上げられることはきわめて少ない。

筆者は，上記の状況を鑑み，大学生活および大学卒業後に日本国内において競技生活を続ける上での日本語ニーズとは何かを明らかにし，キャリア支援をも視野に入れた日本語教育実践のための基礎

的研究に着手した。そして，留学生や競技者（元留学生）へのインタビュー調査を実施し，外国人スポーツ留学生が来日してからこれまで，どのように日本語と関わりどのように日本語を習得してきたのか，どのような場面で日本語を必要としてきたのか，また日本語習得に対する意識はどのように変化してきたのかを質的分析から明らかにしようと試みた。さらに社会人チームの日本人競技者および元競技者にもインタビューを実施し，日本で競技経験のある元留学生が大学卒業後，どのように日本語に関わっていくのか，また社会人チームに入ってから求められる役割やセカンドキャリアにおける日本語の必要性について探ろうと試みた。以下，

2. 研究への取り組み

ここでは，

(1) 外国人スポーツ留学生を対象としたインタビュー調査

(2) 競技経験者（日本人）を対象としたインタビュー調査

について述べる。

2.1 スポーツ留学生へのインタビュー調査

インタビュー調査は，2022 年 1 月から継続的に行っており，2023 年 3 月～ 8 月の間，4 名に対してインタビューを行った。インタビュー時間は一人当たり 1 時間～ 1 時間半であり，1 対 1 で対面もしくは Zoom で実施した。インタビューに際しては，本学の倫理審査で承認された内容に基づき，研究の主旨と目的，調査内容等について英語で書かれた文書を事前に配布し，面接時の冒頭で口頭での説明（日本語）を行った。研究への参加は自由であること，インタビューは録音し，個人情報が特定されない形で文字化すること，回答の拒否は自由であること，途中で参加を取りやめてもよいこと，個人情報は保護されることなどを確認し，同意を得た上で，インタビューを開始した。

＜インタビューガイド＞

①日本留学のきっかけや動機および日本語学習への意識

②高校時代の日本語習得や日本語使用における体験やエピソード

③大学（現在）の専門教育の学びと日本語使用の状況

④自身の将来像と日本語使用についての考え

渡辺（2023）では，大学で学ぶ外国人スポーツ留学生がこれまでどのように社会と関わり合い日本語にどのように向き合ってきたのか，自身の将来像やセカンドキャリアについてどのように考え日本語に向き合おうとしているのかをインタビューの語りから明らかにしていくことを目的に，M-GTA（Modified-Grounded Theory Approach；修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）[2] による質的分析を行った。その際，分析テーマは「外国人スポーツ留学生の日本語習得への意識プロセス」とし，分析焦点者は「外国人スポーツ留学生」とした。そして，表 1 における協力者 A，協力者 B，協力者 C の計 3 人のデータについて分析を行った結果，表 2 にある 24 の概念が生成され

表１　調査協力者情報およびデータの語数

協力者	インタビュー時の学年	競技	来日前の日本語学習歴	逐語録（語数）
A	1年生（2セメ）	ラグビー	あいさつ程度の簡単な日本語	22,366
B	1年生（2セメ）	ラグビー	2週間（簡単な挨拶程度）	9,805
C	1年生（2セメ）	バスケットボール	ひらがな・カタカナ	12,434
D	1年生（1セメ）	ラグビー	なし	8,271
E	4年生（7セメ）	ラグビー	なし	5,009
F	プロ3年目	ラグビー	なし	4,250
G	2年生（3セメ）	バスケットボール	あいさつ程度の簡単な日本語	11,234

表２　生成された概念及び定義（渡辺（2023）より再掲）

番号	概念＜　＞	定義
1	他者の存在や外からの働きかけによる日本留学への導き	他者からの働きかけによって日本留学へ導かれた。自分の意志はそこには希薄。
2	消極的日本留学の選択	本当はほかに行きたい国があった（日本留学は予定していなかった）が、家族の勧めや経済的理由から日本留学に至った。
3	低い日本語学習へのモチベーション	日本語学習への意識が希薄。「時間がない」「行ったらなんとかなる」という思い。
4	自然成行き的な競技選択	幼少期は複数のスポーツをする環境にあり、その競技を選択したのは主体的なものというより、自然的、成行き的な流れがある。
5	戸惑いや不安	日本や日本語に関する知識や具体的イメージを持ち合わせていないまま来日し、戸惑う。
6	他者による日本語学習への導き	他者から日本語学習を促され、勉強しようと思う。
7	集中的な日本語学習	部活と集中的な日本語学習のなかで両立の大変さを感じる。
8	日本人との積極的関りによる日本語習得	日本人との積極的な関りのなかで日本語習得が促進される。
9	他者による言語的・心的サポート	周囲の人（監督、教師、先輩留学生）の言語的・心的サポートが得られた。安堵感。
10	部活で直面する言葉の壁	チームメイトとのやりとりや監督からの指示など、言葉（日本語）の壁に直面する。
11	日本語不安やストレスからの解放	日本語使用の不自由さが軽減され、日本語使用への不安やストレスから少し解放される。
12	競技人生にかけようとする気持ち	ホームシックに直面するも、競技人生を日本で過ごすために乗り越えていかなければならないという気持ち。
13	部活で直面する異文化の壁	母国での練習量や練習方法の違いに戸惑い、日本の「部活カルチャー」に馴染めない。
14	学校・部活場面以外での日本語使用への戸惑い	学校・部活以外での日本語使用は限定的。日本語使用に戸惑いや躊躇がある。
15	他者からの働きかけによる大学選択	他者による勧めやアドバイス、外的要因で進学先を決定する。
16	日本語使用への自信	部活や日常生活での日本語使用には「困っていない」。
17	場に相応しい日本語を身に着けることへの意欲	競技生活を続けるうえで上下関係は大事と認識し、敬語や場に相応しい日本語習得を意識する。
18	大学卒業へのモチベーションの醸成	他者からの助言やけがの経験から、大学卒業を強く意識するようになる。
19	他者依存の専門教育での学び	専門教育の学びがなんとかやっていけるのはチューターのおかげだという認識
20	活躍するプロ選手としての将来像	自身の目標になる選手がいる。将来はプロとして活躍したい。
21	日本永住の覚悟	競技生活を終えても、日本に生活基盤を作って永住したい。
22	セカンドキャリア形成への意識	現役引退後は、競技経験を活かした仕事に就きたい
23	さらなる日本語力向上への意識	今の日本語力に満足することなく、もっと日本語をたくさん覚えたいという気持ち。
24	競技生活での日本語の重要性を実感	選手として注目されるにつけ、人前に出ても恥ずかしくない日本語で話せるようになりたいという気持ち。

た。[3]

アカデミックな留学と異なり，留学の経緯が「競技生活」という特殊な状況を有することから，留学に際しては日本語に対する【意識の希薄さ】がみられること，部活を中心とした競技生活で【日本語を巡る困難】に直面し，選手としてのアイデンティティの獲得に向けて日本語習得に対する【積極的態度】が醸成されること，自身の将来像や期待される自分に近づこうと【日本語向上への意欲】が醸成されることなどが推察された。現在, 残りの 4 人のデータについて継続的比較検証を行っている。

2.2　スポーツ留学生への追加調査

2024 年 1 月～ 2 月，協力者のうち D，E，G に追加のインタビュー調査を行った。

追加調査の目的は，研究過程において導かれた対極概念を深めること，さらに外国人スポーツ留学生の大学生活における学びについての現状と意識の変化についてより具体的に知るためである。詳細は別の機会に譲るが，以下，新たに生成された概念について具体例とともに概観しておく。

対極例の検討 1：

概念 7 ＜集中的な日本語学習＞の対極概念として＜日本語学習の欠如＞という新たな概念が加わった。留学生 G の高校では, それまでスポーツ留学生の受け入れ実績がなく, G が初めての留学生であったこともあり日本語のクラスがなかった。そこで，G は高校のときに日本語学習を集中的にする機会がないまま 3 年間を過ごした。以下，具体例を示す。

みんないっしょにすわった。日本人とずっといっしょの授業出た。そのずっとやってる。英語の先生も英語の授業ある，だから俺をみるはきつかったから，そうそう，ゆっくりゆっくりやってるだけど，みんないっしょにやってるだけど，バスケがんばってるいってたから，まあ，授業出て，日本語の教科書もらったけど，わからない，何が書いてあるか。

対極例の検討 2：

概念 2 ＜消極的日本留学の選択＞の対極概念として，E より＜積極的日本留学の選択＞が生成された。自らが自分の意志で「チャレンジしたい」と日本留学を決意する。以下，具体例を示す。

●●（高校名）と NZ に行こうか迷ったんだけど，日本ってどんな国か興味あって。一人で生きていけるかな，チャレンジしたかった。

なお，表 1 に挙げた概念の統廃合も含め継続的検証を行い，最終的な理論モデルを提案する予定である。

2.3　社会人競技経験者へのインタビュー

外国人スポーツ留学生は，大学卒業後に社会人あるいはプロの選手として日本のチームに所属し，競技を継続することが大きく期待される。そもそもその競技のなかで言語（日本語）は必要なのか，どの程度必要なのか，競技における言語の重要性を探るべく，事前の質問紙アンケートに基づき，競技経験者を対象にインタビューを実施した。インタビューは，2022 年 1 月～ 2024 年 3 月までに 3 名に対し実施した。所要時間はいずれも約 2 時間である。インタビューにあたっては，本学の倫理規定に基づき，同意書を得てから行った。

インタビューガイドに基づき, 半構造化インタビューを実施した。(元) 留学生プロ選手となった後，どのように日本語と向き合い関わっていくのかについて，概ね以下のことがみえてきた。

まず，事前の質問紙アンケートにおいて,「競技における言語（日本語）の役割について，どの程度重要だと思うか」について尋ねた。協力者 3 名のうち 2 名は「さほど重要ではない」と答えている。また, 協力者 3 名ともが「使用言語として日本語よりもむしろ英語を頻繁に使用する」と答えている。そして，大学では日本語がチーム内の共通言語であったものが，社会人やプロになると英語に移行していくという。チーム内の選手の国籍がより多様になることやコーチの指示が選手に的確に伝えられることが何よりも重要視されるため，プロの世界では英語の通訳が入ることが多いこともその理由として挙げられた。実際に，（元）留学生 F（表 1）のインタビューにおいても,「プロになってから日本語を使用する機会が減り，自身の日本語力が低下したと感じる」といったことが語られていた。

しかしその一方で，フィールド外においては，大学で学んだ以上のレベルの日本語力が求められる場面もある。たとえば，これまで支援者に頼っていた生活上の手続き（賃貸物件の手続きやビザ更新など）は，チームによっては専属のマネージャーが担うこともあれば選手自身が行うこともあり，その場合はより高度な日本語力が必要となることが語られていた。

日本の大学で競技経験を積んだ元留学生のチームにおける役割について，今回の協力者 3 名からは共通した見解が得られた。それは，日本での競技経験のある（元）留学生が海外からの他の外国人選手（とくに短期のプロ契約で来日した選手）と日本人選手との間を取り持つことであり，さらに日本での生活経験の中で知り得た日本の文化や日本人の考え，価値観などを外国人選手に伝えるといったことである。このことは，日本にスポーツ留学をした外国人スポーツ留学生の社会人チームでの大きな役割であることは間違いなく，今後は社会人チームに所属している元留学生へのインタビューを追加調査として行い，詳細な検証をしたい。

表 3　協力者（日本人（元）競技者）

協力者	調査時の年齢	競技を始めた年齢	競技をしていた期間	海外での競技経験の有無
A	30歳	5歳	小、中、高校、大学、社会人	有
B	24歳	6歳	小、中、高校、大学、社会人	なし
C	41歳	16歳	高校、大学、社会人	なし

（元）留学生のキャリア形成について，現役留学生の語りからは，「母校の部活やチームでのコーチングをしたい」という語りが多くみられた。一方で，日本人競技者の語りからは，日本語を自由に操れることによりチームの通訳やマネージャーとしてのキャリア形成の道が示唆されており，大学での日本語教育実践においてもそれらを鑑みた教育内容の検討が必要となろう。

3. 研究成果および今後の研究に向けて

これまで外国人スポーツ留学生と日本人競技者の双方に対しインタビュー調査を行ったことによって，外国人スポーツ留学生に対する日本語教育実践へのいくつかの示唆が得られた。そして，どのような日本語のニーズがあるかについて概ね以下のことがみえてきた。

①来日前，日本の生活についての知識とともに簡単な会話や単語などの習得が必要となる。

②来日後，日常生活に必要な日本語とともにクラブ活動をするなかで競技のための日本語や部活内でのコミュニケーションのための日本語が必要となる。

③大学入学後は，生活言語というよりはアカデミックな日本語の習得が課題となる。

④目上の人とのやりとりや取材やインタビューなど人前で話すといったフォーマルな場に相応しい日本語の習得が必要となる。

⑤キャプテンやチームのリーダーとしての発話に必要な日本語力が必要となる。

⑥将来のキャリアデザインを見据え，セカンドキャリアや職業に結びつく日本語の習得が必要となる。

⑦社会人チームの中において日本の価値観や文化を伝えたり通訳をするための日本語が必要となる。

とくに，留学生は選手としての活躍に伴い，チーム内においても単にチーム強化の要員としてだけではなくチームのリーダー的な存在として期待されるケースがある。また上回生ともなれば後輩留学生のサポートなども当然期待されるだろう。さらに社会人になってからも，他の外国人選手と日本人選手との橋渡し的な存在となり日本の文化や価値観を伝えるなど，日本での競技キャリアがチーム内で活かされる場面が種々あることがわかった。今後は，収集したデータの詳細な分析を行うことでこれらの場面をより詳細に検討し，外国人スポーツ留学生の日本語教育に対するニーズをより具体的に提示し，教育内容の検討をしていきたい。

注

1 小宮（2010），山崎（2002），今西・渡辺（2017）など

2 M-GTA は，グレーザーとストラウスによって 1960 年代に提唱されたグラウンデッド・セオリー・アプローチをオリジナル版とし，木下康仁によって改良されたものである。

3 参考文献 4 を参照。

参考文献

(1) 今西利之，渡辺史央（2017）「外国人家事支援人材に対する日本語教育シラバスの提案ー「掃除」「洗濯」業

務での能力記述文と語彙・表現リストの作成」,『専門日本語教育研究』19 号，pp.41-28，専門日本語教育学会

(2) 木下康仁（2020）『定本 M-GTA : 実践の理論化をめざす質的研究方法論』，医学書院

(3) 小宮千鶴子他（2010 公開）『経済のにほんご』https://keizai-nihongo.com/（オンライン教材）

(4) 松元秀雄・高橋直人（2009）「外国人スポーツ留学生の日本の大学への受け入れの現状と課題：ラグビー選手に着目して」『順天堂スポーツ健康科学研究（2）』，pp.214-224，順天堂大学

(5) 山崎信寿他（2002）『理工学を学ぶ人のための科学技術日本語案内』，慶應義塾大学出版会

(6) 渡辺史央（2022）「外国人スポーツ留学生を対象とした日本語授業の一考察：専門語彙リスト作成とタスクを取り入れた実践」『京都産業大学 高等教育フォーラム 12 号』，pp.13-24，京都産業大学

(7) 渡辺史央（2023）「外国人スポーツ留学生を対象とした日本語教育で何ができるのか―留学生へのインタビュー調査からみえたこと―」『2023 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』，pp.280-285，日本語教育学会

Basic Study of Japanese Language Education for Foreign Sports Students

Shio WATANABE

Abstract

This study focuses on international students studying at universities, particularly foreign student athletes who came to Japan for the purpose of athletic competition, with the aim of conducting basic research on Japanese language education practices at universities.

In the field of Japanese language education, there have been few studies dealing with foreign student athletes, and there has been little specific verification of what Japanese language education is necessary for them.

In order to investigate the needs of foreign student athletes for Japanese language education, this study conducted interviews with such students who have studied in Japan since high school, as well as current and former competitors in pro league sport teams.

Keywords : Foreign student athletes, Japanese language education, Interviews, Qualitative analysis, Needs